シルバーウッド→スタイルズ→カクトク→キリン・ディアジオ→識学

語り部の経営者たち

カクトク 満田聖也 CEO 24歳 ②

グローバル企業が求める人材になろうと思ったが…

カクトクは営業に課題を抱える企業と、フリーランスや副業の営業マンをつなぐ日本最大級の営業支援プラットフォーム「kakutoku」を運営し、急成長を遂げている。約30人のスタッフを率いる満田は小学校から高校まで、サッカー漬けの毎日だった。

「勉強？　小中高の成績はまずまずでしたね。塾通いしている同級生は昼間、学校で居眠りしたりするんですが、僕は、高校を卒業するまで1回も授業中に寝たことがないのが自慢です（笑い）」

満田が進んだ熊本商業高校のサッカー部は、県大会で優勝などの好成績を収めていたが、満田の中にはもう「Jリーガーになる」という選択肢はなかった。

「高3に上がる頃に進路を考えるんですが、当時はまだ、自分で起業するという具体的なイメージもなかったですね。同級生と『大きな会社に入ってのし上がっていくか』なんて話もしましたが、現実的に考えれば、進学校から東大に進んだような優秀な人とは別の領域で戦わないと勝ち目はない。そう思ってグーグルの採用基準を調べて、グローバル企業で求められる人材になろうと考えたんですが、英語だけが成績が悪くて（笑い）」

そこで見つけたのが、全学生に占める留学生の割合が約半数という、大分県別府市にある立命館アジア太平洋大学（APU）だった。

「APUは約90カ国から学生が集まっていて、『小さな地球』と呼ばれているんです。英語がヒエラルキーになっている環境に身を置いて、自分に負荷をかけた方がいいんじゃないかと」

高3の夏には、APUの2泊3日の〝オープンキャンパス〟にも参加した。

「参加者の中には、自分の考えをまとめて言えるプレゼン能力の高い高校生もいるわけです。サッカーしかやってこなかった自分は、英語どころか日本語でも太刀打ちできない。こういう人たちが社会で活躍していくんだろう。このままAPUに進んで大丈夫だろうか……劣等感しかなかったですね」

とはいえ、具体的に何をどうすればいいのか、それが分からない。

「高3の2学期になって、3年間同じクラスだった友達と『社長ってかっこいいね』『起業したいね』なんて話になったんですね。ただ起業するにしても、（アプリ共同設立者の）スティーブ・ジョブズのようにプレゼン能力が高くないとダメだろうと。で、APUの推薦が決まった11月から、その友達と2人で、大人とディスカッションできるイベントを始めることにしたんです」

カフェを貸し切り、口コミで集めた20～40代のサラリーマンや主婦、経営者らと、高校生が一緒にテーマを決めて討論できる場をつくった。

「メンバーは20人ほど。最初は大人の意見に圧倒されましたが、ふと『本当に自分が間違っているのか』と感じたんです。どうやら、意見そのものが正しいかどうかはあまり関係がない。言っている人が正しそうに見えることが重要なんだと気づいたんです。それからは大人とぶつかれるようになって、対話する能力が鍛えられました」

そのイベントは高校を卒業するまで月イチで続け、APUに進んだ。別府市内で初めての一人暮らし。入学当初は髪を染めたり、友達とカラオケに行ったり、徹夜で遊んで朝の海岸を散歩したりと、大学生活を楽しんだが、それも2カ月ほどだった。

（つづく）

連載㉙

トランプに握られた日本人の胃袋

奥野修司＆本紙取材班

目の消費者は「食の安全」にて情報がなさすぎる

SNSで目覚め始めた米国人

アメリカ産の食材・食品を扱わない「生活クラブ」。その連合会企画部・前田和記部長の話を続ける。地域的な問題で生活クラブから安全な食品を買えない人は、どうしたらいいのか。

前田部長はとにかく食品の包材の表示欄をチェックしてみることだという。

「加工食品の原材料は重量順に記載されており、その第1位の原材料には義務化されましたから、添加物の表示を見て国産ものを選ぶことです。また、原材料と添加物を区別するスラッシュルールが始まっていて、スラッシュ（斜線）が入った後はすべて添加物という表示に変わりましたから、スラッシュの後ろに見慣れない名前の添加物が多い商品は避けることで、リスクは下げられます」

添加物の毒性評価については、国が安全性を認めた828種類が使用OKとなっているが、複数の添加物を同時に摂取したときの毒性評価はほとんどなされていない。スラッシュ以下はできるだけ少ない方がリスクを下げられるという。

生活クラブの鶏肉売り場

次に、アメリカの消費者の「食の安全」に関する意識を聞いてみた。日本人同様、成長ホルモン剤や遺伝子組み換え食品を食べ続けているのか、それとも変化が出てきているのか気になるところだが、リスクのある食品から距離を置く米国人が増え、オーガニック（有機栽培）が人気だという。

「米国のオーガニック市場は30年前とは比べものにならないほど拡大し、約6兆円とされます。それを支えているのは30代以下の世代です。彼らは、生き方ばかりか食の安全についても、飽食世代とは違う価値観を持ち、それがSNSでシェアされて広がり、オーガニックブームの原動力になっていったのです」（前田部長）

かつての米国の消費者は、いまの日本人と同じくらい食の安全に無頓着だったというが、それはマスメディアの責任が大きい。食品会社や農薬会社からの訴訟リスク、ロビー活動、広告減少などを気にして、警鐘を鳴らす記事を自主規制してきた。それがSNSの広まりで、食の安全に関する情報が拡散され、大きなうねりになってきているという。

「結局、日本の消費者は情報がないのではないでしょうか。なぜ長い時間かけて運ばれてきた米国産の穀物や果物が腐らず、大きな利益を得ているのか。どのようなエサを食べてどのように育てられているのか。何も知らされずに、ただ、安い、うまい、珍しいだけを基準に食材を選んでいる人も多いのではないでしょうか」（前田部長）

無知に慣らされた日本の消費者。トランプと米国の生産者のカモにされている、と指摘されても仕方ないだろう。

（あすにつづく）

▽おくの・しゅうじ　大阪府出身の作家。2006年、「ナツコ　沖縄密貿易の女王」で大宅壮一ノンフィクション賞を受賞。食べ物と健康に関しても精力的に取材を続け、近著に「怖い中国食品、不気味なアメリカ食品」（講談社文庫）がある。

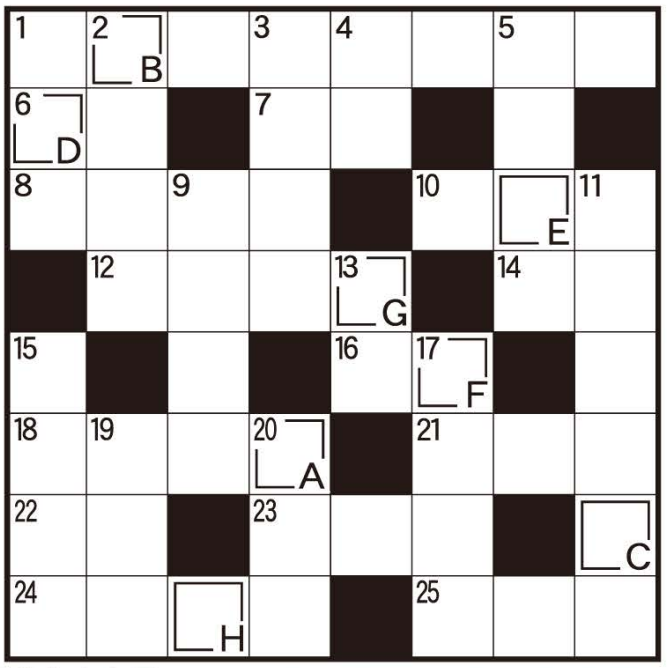
出題・冴木文彦

クオカード1万円 お楽しみパズル

懸賞クイズ〈第2154回〉

〈ヨコのカギ〉
1…チョコレートが主役の日
6…2人で夕日を眺めるならこちらの方角に
7…お代はこちら
8…味噌？　醤油？　鶏ガラ？　塩バター？
10…最近はネットで可能に
12…前置きなし
14…デンプン質がたっぷり
16…足と足の間
18…今年は大統領選が注目
21…絶望しないで！　まだ――の望みが……
22…ボートをこぐ道具
23…春はおぼろです
24…まずはこれから、交際スタート

〈タテのカギ〉
1…アイスクリームの基本
2…〈ヨコ・7〉でお受け取り下さい
3……――かと思うほどの超イケメンも
4…強情な人が張る
5…デレデレに惚れ込んだ状態
9…どちらにしようか？　とキョロキョロ
11…ひとつかと思ったら、次から次に
13…夫の連れ合い
15…おしゃべりが弾んで、気が付いたら朝に！
17…惑星はこれの周りを回ります
19…毀損されたら裁判に
20…一昔前の本はこれを組んで印刷



▼第2149回懸賞クイズ正解と当選者▲　答＝シーエムウチキリ（CM打ち切り）【5000円】仙台市・奥津京季、豊中市・神田省三（敬称略）　▼懸賞クイズ応募規定　▼正解者の中から2名に5000円分のクオカードを贈呈▼締め切り＝2月14日、当日の消印有効▼発表＝2月20日付▼あて先＝〒104－8777　「日刊ゲンダイ」クイズ係▼解答はハガキにA～Hの□に入る文字を順に書いてください。第何回および郵便番号・住所・氏名・年齢・職業・電話番号をお忘れなく